

# アメリカ・オーストラリアへの短期語学留学の成果 および事前事後授業のあり方に関する研究

原 めぐみ

## Study on the Outcomes of Short-Term Study Abroad Programs in the United States and Australia and their Pre-and Post-Guidance Course Designs

Megumi HARA

### 1. はじめに

追手門学院大学国際学部は 2022 年に国際教養学部を改組し開設された学部である。グローバルスタディーズ専攻と国際文化専攻という 2 つの専攻が設置された。グローバルスタディーズ専攻では、世界規模の課題に取り組む行動力を養うことを、国際文化専攻では、国際社会での多文化を自国文化と比較して学修することを目標としている。

国際学部では英語を目的として学修するのではなく、手段として使えるよう学修することを目標として掲げている。そのために学部独自の多様な留学プログラムを用意している。新しいカリキュラムと共にスタートした国際学部の留学制度の特色は、4 年間で 2 回留学に行くことができるデュアル留学制度や世界のトップクラスの大学に留学できるトップ留学、大学での学修と留学を組み合わせたコンセントレーションパッケージである。コンセントレーションパッケージにはビジネス、国際開発、英語プロフェッショナルコースという 3 つのコースがある。

本稿では 4 年間でデュアル留学を達成するために、入学間もない 1 年次の夏に実施されるアメリカのカリフォルニア大学 Davis 校のサマーセッション（以下 UC Davis）と 3 つのコンセントレーションパッケージのうちの 1 つのオーストラリアのアデレード大学語学学校で実施される英語プロフェッショナルコース（以下アデレード）について報告する。

### 2. 問題と目的

原（2018）によると、国際教養学部の全員留学では、すべての留学プログラムに教員が引率

し、学部の多くの教員が入試時期と重なる2～3月にかけて、引率業務に携わることになった。さらに、国際教養学部は学部1年生全員約150名が一斉に留学し、自ら留学手続を行ったり、留学先を選択する必要がないため、目的意識が低い学生が多かったことが問題であった。本稿では短期語学留学の学びを最大化させるための事前事後授業のあり方や、教員の引率無しで渡航する際の留学中のサポートのあり方について事例を元に検証する。

### 3. 研究の背景

短期留学の事前学習の例は、山川（2015）によると安田女子大学の2年次後期に6カ月アメリカ全員留学プログラムでは、英語の授業を通して留学の事前指導を行っていることがわかった。英語力育成のための授業では「基本的に英語」で実施されていたため、困難を感じる学生がいる一方、「留学を意識して集中して積極的に受講している」という学生もいた。2週間のハワイ研修の事前学習として仲里（2017）は、「沖縄とハワイの文化等の比較」という題でレポートを課し、事後学習として「研修に参加して学んだこと、感じたこと」という題でレポートを課した。その結果学生が学び感じたことは「ハワイ文化に対する気づき」「自文化に対する気づき」「ハワイと沖縄（日本）の比較」「コミュニケーションの重要性」「自己を知る」「感謝の気持ち」6つのカテゴリに分類することができた。

将来的に長期留学を目指す学生を育てるための2週間のアメリカでの語学研修の事前指導として、武田（2022）が指導したプログラムでは、参加している学生は英語力によって選抜されているため、事前準備では英語力アップに特化したものではなく、異文化コミュニケーションについての概念を講義やディスカッションを通して学んだ。このようにそれぞれのプログラムやカリキュラムや英語力のレベルに応じた事前・事後授業が各大学で行われていることがわかる。

### 4. 研究の方法

事前事後授業や留学中の学生の課題および、短期語学留学に参加した学生が留学前後で授業中に回答したアンケートと留学前後に学生が受検したTOEICスコアの結果をデータとして収集し分析する。調査対象はUC Davisに参加した国際学部グローバルスタディーズ専攻1年生30名と国際学部国際文化専攻2年生の12名である。

## 5. 結果と考察

UC Davis とアデレード留学の事前授業、留学中の課題・サポート、事後授業および、留学前後のアンケート結果についても述べる。

### 5.1 UC Davis 留学の概要

当プログラムの実施は今年度が3年目となる。初年度はペンシルバニア大学と UC バークレーの2か所のサマープログラムに分かれての参加であったが、危機管理と学年暦を考慮し、2年目は UC バークレーのサマープログラムに一本化された。しかし、渡航手続きの簡略化などの観点から、3年目は UC Davis へと行き先が変更された UC Davis では、英語力アップとアメリカの文化の理解を深めるために4週間の UC Davis CCP (Communication and Culture Program) に参加した。次年度も引き続き UC Davis のプログラムへの参加を予定している。

### 5.2 UC Davis 事前授業

#### 5.2.1 スケジュール

本校の授業は1回105分で1学期に13回の授業である。前年度までは国際連携課と JTB による渡航準備6回と教員による授業7回という様に手続き回と授業回を分けていたが、渡航手続きをよりスムーズに行うために、授業回毎で役割を分けずに105分の授業時間の中で手続きや必要事項の連絡の時間と授業時間を設けた。

JTB の留学業務総合サポートシステム「RyuGO」や国際連携企画課からの連絡に中々応答しない学生や、既往症などの個別でサポートが必要な学生もいたため、短期間で手続きを完了するためには授業時間を使用することが必要であった。授業時間内の時間配分やどのように効率的に情報提供を行うかなどを決定するために、毎週週1回授業外で国際連携課の担当者と打ち合わせを行った。表1に13回の授業スケジュールを示す。

表1：UC Davis 留学事前授業の内容

授業回	授業	手続き
第1回	イントロダクション	RyuGo 登録、提出書類配布
第2回	英語表現 昨年度の留学体験記についてディスカッション	提出書類回収等
第3回	留学先に関するグループ発表について オーストラリアに留学した先輩の体験談	ESTA 登録等

第4回	英語表現（スキットを作成・発表） アメリカのニュースについて	
第5回	UC バークレーに留学した先輩の体験談	
第6回	語学学校についての発表 ワールドイングリッシュについての発表	
第7回	アメリカ合衆国についての発表 Davis の町についての発表	
第8回	留学に関する不安とその解決策について 英語表現	部屋割り、残金確定、Wifi、プリペイド カード案内等
第9回	カナダに留学した先輩の体験談 持ち物についての発表 危機管理についての発表	
第10回	UC Davis についての発表	現地語学学校のプレースメントテスト
第11回	UC Davis に視察に行った国際連携企画課の担当者から UC Davis について発表	現地での危機管理（今まで本学の留学で 実際にあった事例を説明）
第12回	アジアンヘイトについての発表 英語表現	
第13回	留学中の課題（個人研究、留学ジャーナル）について、まとめ	
授業外	海外危機管理セミナー（国際連携企画課主催）	

### 5.2.2 留学先に関するグループ発表

学生は、アメリカへ留学するという意欲はあったが、海外経験が全くない学生も多数いたため、自分たちで必要な情報を調べ発表し、全体で共有することにした。

テーマは国際教養学部の留学事前授業を4年間行った経験から、学生からの質問が多いテーマを選んだ。教員が提示したテーマ以外に何か自主的に調べたいテーマがあれば可能としたが、新たなテーマを提示したグループは無かった。以下がグループ発表で行ったテーマである。

1. アメリカ合衆国について
2. UC Davis について
3. Davis の町について
4. 語学学校／大学のサマープログラムについて
5. 危機管理について
6. 持ち物について
7. アジアンヘイトについて
8. ワールドイングリッシュについて

「4. 語学学校」のテーマを選んだ理由は、毎年大学の正規課程の授業を受講できている学生がいるためである。「7. アジアンヘイト」について発表を行った理由は、過去にオーストラリアに行った学生にインタビューした際に、道で差別的な発言を受けたということを聞いたからである。「8. ワールドイングリッシュ」についての発表に関しては次に書く。

### 5.2.3 ワールドイングリッシュについての発表

英語の授業を担当していると、ネイティブスピーカーのように話さないといけないという固定観念にとらわれている学生が多いことに気づいた。しかし塩澤（2020）が World Englishes の一つとしての「自分の英語（“My English”）」を強く認識し、コミュニケーションのための英語を学ぶことを推奨しているように、ワールドイングリッシュを理解し、自分の英語、つまりジャパニーズイングリッシュでも通じれば問題ないという認識であれば、留学先で話すことへのハードルが低くなるのでは考えた。したがって、グループ発表のテーマとしてワールドイングリッシュを選んだ。

発表したグループはワールドイングリッシュの定義、様々な英語について、アメリカ英語とイギリス英語の違い、自分たちの意見を「英語と言っても様々な種類があり、場所によっては伝わらないことがある。だからといって正しいものはなく、それぞれが個性である。」と発表した。発表後にカナダ英語、シンガポール英語、インド英語、オーストラリア英語など多様な英語を実際に聞いたり真似したりするアクティビティを行ったが、それだけではワールドイングリッシュを理解するのが難しかった学生もいたようで、以下のようなコメントがリフレクションに書かれていた。ワールドイングリッシュに関しては次年度以降の課題事項である。

学生 1. 「ネイティブな英語にふれ、流ちょうな英語の発音ができるようになりたいです。」

学生 2. 「今回はアメリカに行くのでアメリカ英語をメインに学習する必要があると思いました。」

### 5.2.4 先輩からの体験談

グローバルスタディーズ専攻の学生で昨年度 UC バークレーへ行った 3 名の学生に体験談を授業中に話してもらった。さらにコンセントレーションパッケージの英語プロフェッショナルコースでオーストラリアに行った学生 1 名、学外のプログラムでカナダに行った学生 1 名の計 3 回に渡って、先輩からの体験談の機会を設けた。先輩からの体験談を聞くだけでなくカレイドスコープ（学生による国際学部の学び）に記載されている先輩の留学記を読み、レポートを書く課題も与えた。

### 5.2.5 留学に関して不安なこと

春学期後半になり、より留学をジブンゴトとして考えることができるようになった時に留学に関して不安な事とその対策についてグループディスカッションを行った。不安なことは大きく分けて3つあり、1. 対人関係に関すること（ホームシック、差別、交友関係）、2. 生活に関すること（治安、お風呂とトイレ、体調管理、出費、ご飯）、3. 英語力（自信がない）などがあった。グループディスカッションを行う事で、自分たちで対処できることが多くあることを認識し、「今日不安なことについて話して、もっとルームメイトとお互いのことを話しておこうと思う。」や「今日のディスカッションで不安に思っていた気持ちは和らぎました。」などという授業後のリフレクションからも、不安が多少軽減されたことが見て取れた。

### 5.2.6 留学中の課題

各自で事前にテーマを設定し、現地で調べ、帰国後にそれをまとめて発表する、という個人研究レポートという課題を設定した。調べ学習のように単に「調べてきました」というレポートにならないように留学前に仮説をたて、参考文献を元にレポートを書き提出させた。留学先で研究的視点を持って現地の人にインタビューしたり、観察をしたり、写真や動画を撮ることができるようにこの課題をデザインした。

### 5.2.7 留学に関する目標設定

授業回中盤以降も、課題の提出がきちんとできていなかったり、去年と同じ場所の UC バークレーに行くことと勘違いしている学生がおり、留学に対して未だ受け身の姿勢が続いていると感じ、留学に対する目標設定を行うことにした。1. 英語力、2. 多文化マネジメント力、3. 人間関係構築能力、4. 自己管理能力という4つの項目に関して目標を記述させた。この目標を留学中も毎日見ることができるように、留学ジャーナルのファイルのトップに目標を記入するスペースを作った。

## 5.3 UC Davis 留学中

### 5.3.1 UC Davis 留学の概要

UC Davis では2名1組で3食付きの寮に滞在した。授業開始前に全体オリエンテーションや、希望者は後日現地大学生とのウォーキングツアーに参加した。キャンパスが広いため現地で講習を受け自転車を借りた学生もいた。週末はデイビスの街やサクラメント（バスで約30分）やサンフランシスコ（バスで約2時間）まで行き過ごしていたようだ。

### 5.3.2 UC Davis Communication and Culture Program の授業

現地での授業は 15 名から 20 名の少人数制で以下の時間割で行われた。午前中は各自自由に主に寮で課題などをして過ごした。プレイスメントテストにより、レベル別でクラス分けされていたが、全員が日本人のクラスもあったようだ。しかし授業外で、現地の大学生と会話ができるプログラムなどがあり、それらに参加することで、夏のプログラム以外の学生とコミュニケーションができる機会があった。

学生が書いた留学ジャーナルによると、授業の課題では現地の人にインタビューをしたり、アメリカの国立公園についてプレゼンをするなどの課題が出されていたようだ。金曜日はアクティビティの日でサルサダンスやボーリングなどがあり、最後の金曜日は Graduation Ceremony があった。

1 : 30 - 2 : 00 Listening and Pronunciation

2 : 30 - 3 : 20 U.S. Society and Culture

3 : 40 - 4 : 30 Intercultural Research Project

4 : 40 - 5 : 30 Everyday Expressions and Idioms

### 5.3.3 留学中の本学からの課題

留学中は現地での課題に加え、留学ジャーナルを 1 日 1 回 22 : 00 時までに書く事や留学期間を通じて個人研究レポートの資料を集めることが課題であった。留学ジャーナルは図 1 のように、トラブルの有無、健康状態、問題報告、日々の気づき、週末の予定を書く欄があり、担当教員が日々チェックし、気になったことがあった場合は、メールや LINE で学生と連絡をとり、必要であれば個別で Zoom ミーティングを行った。学生は帰国後、留学中に書いたことを振り返ることができるように、留学ジャーナルを日々エクセルファイルに保存した。

4. 日課報告 Daily Report \* [?] [?]

無事終了しました Finished Daily Work All Right

トラブルがありました Had A Problem

その他 [?]

5. 心身の健康状態 Physical & Mental Condition \* [?] [?]

良好 Good

不調 Not good

その他 [?]

6. 問題報告 Problem Report [?] [?]

回答を入力してください

7. 留学日誌 ※Excel版留学ジャーナルから毎日の学びや気づきをコピー&ペーストしてください。留学報告書作成のための重要な資料となります。  
Journal: Record any learning outcomes, experience, and meaningful event of the day. \* [?] [?]

回答を入力してください

図 1：留学ジャーナルの回答画面

### 5.3.4 留学中のサポート

参加学生全員と国際学部の職員と教員、国際連携企画課、JTB の担当で LINE グループを作成し、日本と現地間の移動や寮に関する情報はその LINE グループで共有した。主に学習面でのサポートとして、週 1 回 Zoom ミーティングを 3 人の教員が計 4 回 30 分～1 時間程度行い、現地での授業や寮の生活について困り事を聞いた。Zoom ミーティングは学生が参加しやすい平日の 22:00 に設定し、教員間で Zoom ミーティングの際に学生と話す内容について調整を行った。

## 5.4 UC Davis 留学事後授業概要

3 日間集中授業で行われた事後授業では、初日に留学の振り返りと 2 年次以降で目指すことができるトップ留学の説明会、2 日目は個人研究レポート作成と発表準備を行った。3 日目は 1 人 4～5 分程度の発表を英語で行った。帰国後すぐということもあり、国際連携企画課の担当者によるトップ留学を聞き、それを目標に引き続き学習を頑張るという学生が多くおり、「トップ大学留学にとっても興味を持ちました。結果が出せるように勉強を頑張って、3 回生で参加できるように努力したいと思いました。」などのコメントがあった。

### 5.4.1 TOEIC スコア

授業時間外の時間を使用し、学生は帰国約 1 週間後の 9 月にオンライン TOEIC を各自受検

した。留学に参加していない学生は学期末の7月に TOEIC を受検した。入学時と留学後両時期に TOEIC 受検し UC Davis に参加した 18 名の平均点は 54.6 ポイントアップした。しかし松宮 (2023) によると、昨年度同じプログラムで UC バークレーに留学した学生の平均点は 78.4 ポイントアップしており、今年のスコアの伸びがやや少なかったことがわかる。ちなみに留学に参加していない国際文化専攻の学生の平均点は 45.0 ポイントアップしている。アデレードに参加した学生は帰国後にまだ TOEIC を受検していないため、今後の受検でスコアの変化を測定する必要がある。

表2：TOEIC スコア  
グローバルスタディーズ専攻 (留学参加有り) 国際文化専攻 (留学参加無し) 得点差

TOEIC実施時期	グローバルスタディーズ専攻 (留学参加有り)	国際文化専攻 (留学参加無し)	得点差
人数	18	115	
4月平均点	346.4	310.4	36.0
留学終了時(9月)/7月平均点	401.0	355.4	45.6

平均点ではなく、個人別にスコアを見ると、最もスコアがアップした学生 A は 235→495 (+260) と学生 B は 430→660 (+230) の 2 名であった。50 ポイント以上アップした学生は計 8 名いた。入学時と帰国後に期間内で TOEIC 受検をできていない学生が 12 名いるため、帰国後の TOEIC を事後授業の時間内で受検するように設定することも、次年度からの改善点である。スコアの上昇が少なかった原因として考えられるのは、学部全体の入学時の TOEIC の平均点が今年は約 50 ポイント低かったことなどが関係しているのかもしれない。

#### 5.4.2 個人研究発表

発表は、英語を中心に説明の難しい箇所は日本語を使用してもいいという指示を出したが、日本語を使う学生がほとんどおらず、留学の成果であると思われる。事後授業では去年 UC バークレーに留学に行った 3 人の先輩学生がメンターとして参加し、発表内容やレポートの書き方に対するアドバイス、発表に対する質問・評価などを行った。メンターとして参加した学生は「全員 (の発表) が違う内容であったため、いろんな研究を聞くことができてよかった。」と述べていた。

#### 5.4.3 個人研究テーマ

個人研究のテーマを分類すると以下ようになった (表3)。実際に現地の大学生や住んでいる人、先生などにインタビューをするということが課せられていたため、身近な生活 (文化) に関するテーマが多かった。留学ジャーナルに「サクラメントのカリフォルニアミュージアムに行き、個人研究テーマのアメリカの食生活についての展示を見た。」や「留学後の研究の材料を探すために大学内にある博物館に行きました。」などというコメントがあることから、

留学中も研究テーマについて考えていたことがわかる。必修科目の演習クラスで春学期は主にプレゼンテーションの方法を学び、秋学期にレポートの書き方を学ぶ。レポートの書き方を詳しく学ぶ前であったが、事後授業に参加した全員が2000字以上のレポートを書き提出した。

表3：個人研究テーマの分類と例

個人研究のテーマの分類	タイトルの例	数
生活（文化）	チップ文化について	10
価値観	日本人とアメリカ人の時間に対する考え方	5
交通	道路標識はなぜ世界共通にならないのか	3
食	アメリカでの食べ残しについて	3
衣服	デイビスの流行	3
ジェンダー	レインボーフラッグの秘密	1
教育	アメリカと日本の言語学習の違い	1

#### 5.4.4 個人研究による成果

「アメリカは〇〇である」と思っていた学生が、実際に現地で調べてみるとステレオタイプのみで物事を考えるのは良くないと気づいたことがわかった。例えば「アメリカの治安は悪い」と思っていた学生は、調べてみると同じカリフォルニア州であっても治安の良さに地域差があることがわかったり、トイレに関して調べた学生は、日本のトイレは世界的にも機能が素晴らしいと賞賛されているが、アメリカのトイレは日本のトイレと比べてもそこまで不便ではないことがわかった。「アメリカ人は親切心がないのか？」というテーマで調べた学生は、現地でバスやタクシーや店でアメリカ人に親切にされた経験から、日本人もアメリカ人も親切だが、アメリカ人の方が人助けなどを躊躇しないことがわかった。何事も自分の印象で決めつけたりするのではなく、調査して確かめたり、当たり前疑問をもったりするという、2年次以降の研究をする際の素地が養われたと考える。

#### 5.5 アデレード留学プログラムの概要

コンセントレーションパッケージの1つである英語プロフェッショナルコースのプログラムは、オーストラリアのアデレード大学付属の語学学校に通いながら、現地の小学校訪問や日本文化のワークショップや授業見学ができる本学独自のプログラムである。初年度の2023年度は国際文化専攻の2年生3名が参加し、2024年度は同専攻の2年生が12名参加した。教育に特化したプログラムであるが、参加者の全員が教職課程を履修している学生ではない。アデレード留学の事前授業として専門授業「Advanced English 3」では英語の教授法を学び、「自主研究」で留学準備を行った。

## 5.6 アデレード事前授業

### 5.6.1 Advanced English 3 での事前授業

外国語の教授法の理論を学びながら、授業実践を行う授業である。学んだ理論を元に、中学の教科書を使い授業を組み立てたり、アメリカやオーストラリアからの短期留学生グループに対して、授業内で日本文化を紹介するワークショップを行った。授業で行ったワークショップを改良し、アデレードでも行った。本科目は留学に参加しない学生も履修することができ、教職課程履修者は履修推奨となっている科目である。

### 5.6.2 自主研究での事前授業

専門授業以外にアデレードに留学に行く学生に特化した事前授業を自主研究という科目で行った。自主研究は通年の科目である。自主研究のスケジュールを表4に示す。4月の自主研究の授業開始前から留学の申し込みが完了していたため、春休み中から英語の自主学習をスタートした。自主的に映画や Duolingo などを使用し英語の学習をし、その成果を2週間に1回レポートで提出させるようにした。4月にアデレード大学の担当者が本学を訪問したため、プログラムの詳細について説明を受け、学生は質問をした。

事前授業では、昨年同じプログラムに参加した先輩からの体験談の発表、留学先に関するグループ発表、プレイスメントテストなどの国際連携企画課からの手続きの案内を行った。グループ発表のテーマは教員と学生で相談し、1. ホームステイ 2. オーストラリアの文化とマナー 3. 留学中にやってはいけないこと（治安等）に決めた。

現地での小学校や語学学校での授業見学に備え、追手門中学校で中学1年生の授業見学をする機会をいただいた（授業見学の様子 <https://tinyurl.com/smfs7sp6>）。大学の教職課程の学生が履修する英語教育に関する授業の見学も行った。これらの授業観察の経験を通し、学生は授業見学を行うとき際にどのような観点で観察するのかということや観察レポートの書き方を学んだ。

表4：アデレード留学事前事後授業（自主研究）の内容

授業回	授業
春休み	第一回オリエンテーション、英語自主学習課題
第1回	アデレードから担当者が本学訪問 現地について Q & A
第2回	中学校の授業見学
第3回	教職課程の英語教育の授業見学
第4回	授業見学に関するフィードバックと見学レポートの書き方
第5回	第二回オリエンテーション（プレイスメントテスト等）

第6回	留学先に関するグループ発表
第7回	昨年度参加した先輩からの体験談
授業外	海外危機管理セミナー、ホームステイ・ワークショップ
留学中	Zoom ミーティング4回、留学ジャーナル、個人研究レポートの資料収集
第8回	留学ジャーナルで留学振り返り（今後の留学体験記、説明会の担当など決定）
第9回	個人研究発表①
第10回	個人研究発表②
第11回	個人研究発表③ まとめ

## 5.7 アデレード留学中

### 5.7.1 アデレード留学中の授業

アデレード大学付属の語学学校では、1クラス15名までの *General English for Academic Purposes* を月曜日から木曜日に受講し、金曜日は *Australian Studies* を受講した。*Australian Studies* では博物館やセントラルマーケットに行き、先生が課したタスクに取り組んだり、オーストラリアのスラングを学んだりする内容であった。クラスによっては日本人が5名のみで、それ以外が他国からの留学生であったため、家でも学校でもまさに英語漬けだったようだ。クラスメイトの出身地もドバイ、中国、韓国、東ティモール、スペインと多様であり、ペアワークやグループワークをする際に、オーストラリア以外の文化を学ぶ機会があったようだ。留学ジャーナルに「ポスターを使ったプレゼンがあります。東ティモールの子と一緒にやるのですが、お互いが知っている映画がなく、カルチャーショックでした」という記述があり、その後有名なディズニーの映画などを提案したが相手が東ティモールの映画を提案してきて困ったらしく、自分の当たり前が相手の当たり前ではないことを学んだ様子であった。授業時間外でも語学学校やアデレード大学が提供しているイベントに参加し、留学生だけでなく現地の大学生と交流する機会もあったようだ。

現地では語学学校の本プログラム担当教員と定期的にミーティングがあり、語学学校での授業見学は異なった3つのレベルの授業見学を行うことができた。小学校訪問では半日授業見学をし、授業後に小学校の先生にインタビューする時間をいただいた。教職課程を履修している学生はこの訪問のことを「今日はオーストラリアの教育現場に行き実際に現場を見に行ってきた。初等教育だったがここでも、日本とオーストラリアの教育の違いと考えの違い方の違い見られた。この題材は本留学の自分の研究レポートであるのでたくさんの方のことを質問したり、観察してきた。一番は実際の先生の考えが見られたことが本当に貴重な経験であった。教育の現場に就きたいのであればこの留学プログラムはとて素晴らしい経験になるし本当にお勧めするプログラム内容であると改めて感じた。」と書いている。

日本文化のワークショップは12名が2グループに分かれ、1つのグループは日本文化に関するオリジナルのかるたを作成して参加者とかるたをしながら日本文化を紹介した(図2)。もう一つのグループは書道を行った。書道のグループは参加者が書く漢字を用意していたが、参加者のほとんどが中国出身だったため、漢字を急遽ひらがなに変更したようだった。

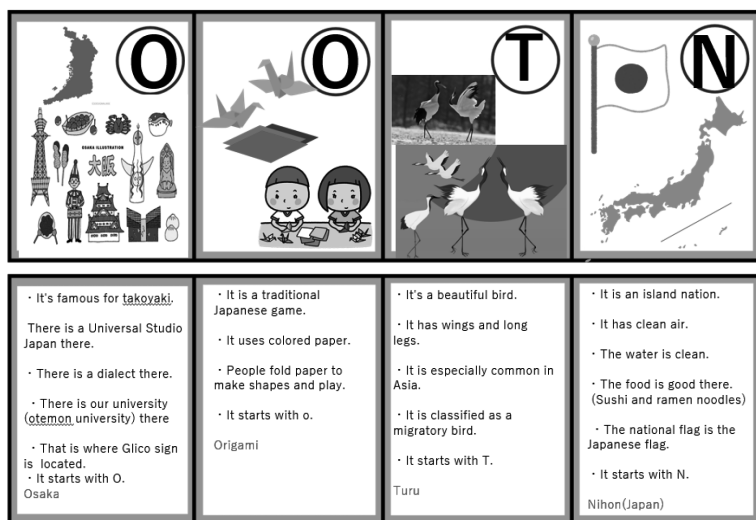


図2：オリジナルカルタの札

### 5.7.2 アデレード留学中のサポート

US Davis 同様、毎日の留学ジャーナルを課題にし、週1回教員による Zoom ミーティングを計4回行った。同じ場所に留学しているが、全員がホームステイをしており、曜日により各自の授業時間午前と午後と異なっていたため、この週1回のミーティングが唯一12人全員揃う機会であり、楽しみにしていたようであった。前半ホームシックになった学生がいたが、11人の仲間のおかげで乗り切れたとジャーナルに記載していた。

留学ジャーナルに関しては、「毎日書く必要がない。」や「留学中はその時間を楽しみ、帰国してから書けば良い。」という意見もあると思うが、オーストラリア到着初日の興奮がとても鮮明に記述されている。例えば「今日は初めて海外での生活を自分自身で感じた日だった。自分の無力さとホストファミリーの優しさに涙が出続けていて困っています。(笑) 胸がいっぱいでお腹がすきませんでした。ずっと平凡な生活を送ってきた私にとってこの体験は大きな一歩であり、自分で自分を受け入れられていないのかなと思いました。」と書いてある。本人達も帰国後にはこのような感情を忘れてしまっている可能性があるため、留学を振り返るツールとして留学ジャーナルは役割を果たしていると考える。

留学中の生活に関する質問は JTB のサービスを利用し、学生たちで自己解決できていた。

滞在中1名がインフルエンザにかかったが、留学生サポートサービス（LINE電話で学生が24時間相談できるサービス）を利用し、保険請求について質問したり、航空券や帰りの荷物などの質問については各自でRyuGoを使用し聞いていた。12名全員がホームステイをしたがホストファミリーに関する不満がほとんどなかった。原（2018）によると、国際教養学部での全員留学の際には「ホストファミリーがアジア系だった」ということをトラブルとして記述した学生が4名いたため、事前授業でオーストラリアは多民族国家であることを意識させた。グループでホームステイについて発表したり、先輩からの体験談を聞いたり、危機管理セミナーでのホームステイ・ワークショップなど、複数回にわたってホームステイについて学ぶ機会があった。その結果、不満がほとんどなかったと推察できる。

## 5.8 アデレード事後授業

事後授業は秋学期に計4回行われる予定である（現時点では1回のみ終了）。留学ジャーナルや授業見学や学校訪問後に書いたレポートの内容を参加者で共有しながら、振り返りを行い、順に個人研究について発表していく。個人研究テーマの内容は、学校訪問があったことや教育に特化したプログラムであるため、教育に関するものが一番多かった。例を表5に示す。

表5：個人研究テーマの分類と例

個人研究のテーマの分類	タイトルの例	数
教育	オーストラリアと日本のこどもに対する考え方の違い	4
環境	オーストラリアの環境問題「脱プラ・リサイクル」	3
生活（文化）	多文化社会の形成	2
動物	オーストラリアに住む鳥類からわかる街の環境	2
ジェンダー	オーストラリアにおけるジェンダー問題	1

## 5.9 両プログラム共通の留学事前事後アンケートの結果

両プログラムに参加した学生対象に事前アンケート（5段階選択式質問26問、記述式質問3問）と事後アンケート（5段階選択式質問26問、記述式質問9問）を授業内でMicrosoft Formsを使用し回収した。5段階選択式の質問項目は、「外国・多文化・他言語に関する意識」「自分と他者との関わりに関する意識」「英語に対する意識」に関するものである。結果に関しては主要なものに限定して報告する。

### 5.9.1 事前アンケートの結果

UC Davis 30名とアデレード12名計42名の回答があった。そのうち留学経験のある学生は2名のみであった。

### 5.9.2 留学に対する不安

「留学に対する不安は何ですか。」という記述項目に対する回答では、「英語力」(17)、「治安・安全面」(5)、「(現地での)人間関係」(4)と「英語力」に対する不安が圧倒的に高いことがわかる。原(2018)の留学1週間後に行ったアンケート結果では、生活や留学先の授業に関する不安は1週間経つと減少していたが、英語力に対する不安度の変化が1週間ではなかったことから考えると、「英語力」に関する不安を留学前に軽減することが重要であることがわかる。このことから事前授業では英語力を強化する時間を増やしたり、必修の英語の授業の内容を、留学を意識したものに変わっていく必要がある。

### 5.9.3 事後アンケートの結果

UC Davis 23名とアデレード12名計35名の回答があった。

### 5.9.4 「英語に対する意識」に関する項目

「外国・多文化・他言語に関する意識」、「自分と他者との関わりに関する意識」、「英語に対する意識」の質問項目に関しては留学期間が1カ月ということもあり留学前後で顕著な変化はなかった。

しかし「多様な英語に対する意識は変わりましたか。変わったならどのように変わりましたか」という質問に対する個々の記述回答からは、意識の変容が見られた。以下の例のように、ワールドイングリッシュや多様な英語に実際に触れることで、英語のなまりに対して寛容な態度が生まれ、自分の英語に自信を持つことができていることが窺える。今後は事前授業でワールドイングリッシュや多様な英語について扱う時間を増やしたり、留学前に国際学部在籍している様々な出身国の留学生と英語でコミュニケーションする機会を増やすべきである。

学生1. 「英語は世界の共通言語ということもあり、英語は英語での様々な種類があり難しかった半面白かったです。」

学生2. 「オーストラリアはたくさんの移民が住んでいたのがなまりがすごかったのを感じた。そこで私は英語の発音は各国のユーモアであると思った。なので、自分の英語の発音も一つのユーモアなので英語への意識が変化した。」

学生3. 「英語という存在に苦手意識を持たなくなった。すべての国とつながる素敵なツールであるという意識が身についた。」

### 5.9.5 事前授業で役に立ったこと

「留学前の授業で役立ったことはありますか。あれば具体的に書いて下さい。」という記述式

の質問への回答は（複数回答有り）、「先輩の体験談」（8）、「事前授業（留学先についてのプレゼンテーション）」（7）、「事前授業（危機管理について）」（7）、「危機管理セミナー」（6）、「日本文化のワークショップの準備」（6）、「事前授業（重要英会話フレーズ）」（2）、「英語の授業」（2）という順になった。

「先輩の体験談」はオーストラリア、アメリカ、カナダに留学に行った先輩から3回に渡り行ったため、学生の印象に残りやすかったのかもしれない。海外が初めてという学生が多く、先輩からの生の声が役に立ったという声が多かった。

#### 5.9.6 留学中に達成できたこと

「留学期間で自分が達成できたことを具体的に書いて下さい。」という記述式の質問への回答では（複数回答有り）、「（積極的に英語を）話せた」（20）が圧倒的に多かった。次に「（英語で）授業ができた」（5）「外国人の友達ができた」（5）「リスニングの上達」（4）「（英語で）買い物ができる」（4）という順であった。

初めての海外という学生も多いため、本学でネイティブスピーカーが教える英語の授業を受けたり、留学生と英語を使う機会があっても、現地の人と英語で話せたという喜びが一番大きかったようである。次年度以降は「話せた」というだけでなく、「～について話すことができた」という達成感をもって帰国できるような事前指導を心がけたい。

## 6. 課 題

国際教養学部では1年終了後の冬に全員留学を行っていたが、国際学部のグローバルスタディーズ専攻では入学間もない夏休みに一斉にアメリカに留学させている。カリキュラムの完成年度を迎えるに当たって、1年の夏に留学する意義や、同じ期間、同じ場所で一斉に留学する意義を再考する時期に来ている。全員留学の効果として、落合（2020）は「留学に否定的だった学生も否応なく留学することで、異文化との出会いを通して留学への否定的な見方を改めた」とあり、プログラムの内容や留学の時期は変わっても、全員が留学することで一定の効果があると思われるため、グローバルスタディーズ専攻においては留学を卒業要件から外すべきではないと考える。「留学に必ず行けるからグローバルスタディーズ専攻を選んだ」という学生の声もあり、国際文化専攻との差別化を図るためにも必要であるからだ。

学部完成年度後のカリキュラムポリシーやディプロマポリシーを達成するための留学プログラム制度については、学部で留学ワーキンググループを立ち上げ議論中である。グローバルスタディーズ専攻の学生の留学先や時期を選択制にする案や、コンセントレーションパッケージの行き先や種類を増やす案、トップ留学の見直し案などがでている。これらの留学先を決定す

る場合も、留学を最適化するための事前事後指導についても併せてカリキュラム上にデザインできるかどうかが課題である。

#### 参考文献

- 原めぐみ. (2018). 短期全員留学プログラムの評価と事前授業のあり方 (実践報告). 追手門学院大学国際教養学部紀要, (12), 41-57.
- 松宮新吾. (2023). 2023年度国際学部留学実施状況調査. 追手門学院大学国際学部, 1-16.
- 仲里和花. (2017). 海外研修に参加した大学生の異文化コミュニケーション能力-2016年度ハワイ研修参加学生の事例から-. 沖縄キリスト教学院大学論集 Okinawa Christian University Review, (14), 37-46.
- 塩澤正. (2020). 「国際英語論」からの日本の英語教育への示唆-Model of "My English" の提案-. アジア英語研究, 22, 13-56.
- 落合知子. (2020). 全員留学の効果と課題-日本学生支援機構海外留学支援制度への提言-. 留学交流, 107, 10-20.
- 武田礼子. (2022). 短期海外研修における留学準備対策と学修効果. 成城大学共通教育論集, (14), 1-26.
- 山川健一, 平本哲嗣, 松岡博信, & 三宅英文. (2015). 留学の事前指導と事後指導の一環としての英語による大学の授業. 安田女子大学紀要, 44, 181-90.